**東條　竹秋 （とうじょう・ちくしゅう）**

**１、プロフィール**

徳島県出身。東京で小学校校長を経て、弁護士となる。弘前の知人のつてで黒石に疎開する。そこで俳句社「茜」を創立し、終戦後から約10年間俳句振興に努める。

＜生没＞

1888（明治22）年12月10日～1960（昭和35）年５月18日

＜代表作＞

俳誌「茜」刊行

＜青森との関わり＞

終戦後黒石二庄内に疎開中、俳誌「茜」を創刊。弘前で弁護士活動の傍ら県内外の句友と交流、振興に努めた。

**２、作家解説**

徳島県徳島市八多町に生まれる。東京高等師範を卒業し、昭和４年板橋町板橋尋常高等小学校校長となる。教員として実務的能力に秀れ（秀で・優れ）、当時としては珍しい教材の指導書を作成し、現場の教師たちに大いに利用された。教職の傍ら中央大学の夜間に通い、法律を学ぶ。昭和11年横浜弁護士会に入会をかわきりに弁護士として生活する。

本県との関わりは、東京空襲を避け、昭和18年弘前市の時計屋の知人を頼って弘前に疎開する。しかし、その友人宅も手狭なため、温泉のある黒石の二庄内に移る。この時「青荷山人」の号で短歌を作っていた丹羽洋岳と交流を持った。ここに２～３年程住む。知った人もおらず、特に雪深い冬の生活は大変であった。寂しさをなぐさめるために３里の道を歩いて、頻繁に洋岳に会いに行った。洋岳を「仙人」のニックネームで呼んでいた。洋岳も「茜」に投句している。

この時期、俳誌「茜」を創刊する。最初の句会は二庄内で開いているが、交通の便が悪いために５、６人の集まりであった。この後黒石の町の中に転居。近在からも通いやすく句会の人数が増える。昭和23年、ここ黒石で娘が誕生している。戦後まもなくは印刷もままならず、経費面で持ち出しが多く苦労した。

生活を弘前下銀に移し、弁護士の傍ら公証人の仕事もした。句会は自宅の他、長勝寺でも開いていた。住職夫妻須藤喚月、喜美子の縁で、竹秋亡き後、茜吟社の有志等が長勝寺に句碑―――城近く　住む幸ありて　花万朶―――を建立した。

茜吟社は、蓬田、五所川原など２、３の支部を持つほど盛んな時期もあった。創刊号は昭和21年２月で、第２号とあるがこれが最初の俳誌である。竹秋の死をもって茜吟社は絶える。最終刊は昭和31年１月。この間23冊の俳誌を出版している。戦後まもなくの10年間、県内はもとより県外にも広く句友を求めて「茜」を発刊した。戦後の復興を武力でなく文化の力でと願い、俳句を作れと俳誌に掲げられている。

**３、資料紹介**

〇「茜」（時にひらがな、カタカナ書きの号もある）

冊子・謄写、活版印

昭和21年２月～昭和31年１月

17.2cm×25.1cm（14.2cm×20.3cm）

東條竹秋主宰。疎開先の黒石二庄内で茜吟社「茜」俳誌を創刊する。戦後の復興の気運興隆の願いをこめて、全国に句友を求める。県内はもとより、東北、東京、静岡、四国と遠方からの投句者も多い。

〇『俳句の作り方』

出版物

昭和23年８月15日

12.2cm×9.0cm

東條竹秋著。発行人は蓬田茜吟社支部代表坂本歩洋。携帯に便利なサイズの句作マニュアル本である。